

2026年 オフショア・ソフトウェア開発比較

2026年、ベトナムがソフトウェアエンジニアリングで選ばれる理由

インドおよびフィリピンとの率直な比較——そして、多くのアウトソーシング型ソフトウェアチームにとって、なぜベトナムがより円滑な選択肢なのか。

オフショアソフトウェア開発に関する議論では、常にベトナム、インド、フィリピンの3カ国が中心となります。ベトナムに対抗して営業をかけるベンダーは、ベトナムの英語スコアを指摘するのを好みます。しかし彼らがめったに言及しないのは、比較対象がどこなのか——そして、3年間にわたるオフショアチームのコストを実際に左右するものは何か、という点です。以下は、数字に基づいた根拠です。

総コストを左右する唯一の数字：定着率

区分	ベトナム	インド	フィリピン
ソフトウェア・IT分野の年間離職率	約5～18%	約20～30%	約15～25%（オフィス勤務）

ベトナムの離職率は3カ国の中で最も低だけでなく、独立した複数の情報源において最も一貫性があります。これは、ビジネスケースを構築する上で重要な意味を持ちます。

これが金額にどう影響するか。 エンジニアの採用、オンボーディング、立ち上がり期間を含めると、一人を補充するコストは給与の3～6カ月分に相当します。40名のチームを3年間にわたってモデル化すると次のようになります。

- ベトナム（離職率12%）：約15名のエンジニアが入れ替わり → 離職に伴うコストは給与約60カ月分
- インド（離職率28%）：約34名のエンジニアが入れ替わり → 離職に伴うコストは給与約136カ月分

月額（フルコスト）平均2,500ドルのチームで計算すると、これはおよそ15万ドル対34万ドル——時給にすればわずか数セントしか変わらない料金表の裏で、19万ドルもの差が生じます。しかもこの金額は実態を過小評価しています。年間離職率が30%のチームは、常に「一部が新人」という状態から抜け出せません。なぜそのスキーマ設計になっているのか、どの連携部分が壊れやすいか——といったドメイン知識は、離職のたびに失われていきます。離職率の低いベトナムチームは、その知識を失うのではなく、積み重ねていくことができます。

英語力への懸念——本来向けるべき相手を間違えている

	スコア（2025年EF EPI）	レベル	世界順位（123カ国中）
フィリピン	569	高	28位
ベトナム	500	中程度	64位
インド	484	低	74位

フィリピンの優位性は本物であり、リアルタイムの音声業務においてはそれが決定的な要素になります——この点に異論はありません。しかし、「ベトナムには英語力のギャップがある」という一般的な言説は、インドのスコアをその隣に並べて示すことがほとんどありません。ベトナムはインドよりも16ポイント、そして10位も高いスコアを記録しています——インドは、欧米企業が二十年にわたり何の躊躇もなくソフトウェアエンジニアリングをオフショア委託してきた市場です。英語力を理由にベトナムを候補から外すのであれば、一貫性を保つためにはまずインドを外すべきでしょう。しかし、そうなることはめったにありません。

これが実務上機能する理由は、ソフトウェアエンジニアリングにおけるコミュニケーションが、書面かつ非同期であるという点にあります——チケット、プルリクエストのコメント、仕様書、スプリントデモなど、リアルタイムの電話対応で

はありません。失敗の主な原因は不明瞭なアクセントではなく、不明確な要件であり、それは有能なベンダーであれば当然備えているべき体制によって解決されます。すなわち、要件の明確化を担う流暢な英語力を持つテクニカルリード、すべてのストーリーに対する書面での受け入れ基準、そしてデモを軸としたスプリントレビューです。

ベトナムは低価格な選択肢ではなく、実力による選択肢である

料金水準は他の2カ国とほぼ同じ帯域にあります。ベトナムは時給およそ27〜45ドル、フィリピンは25〜40ドル、インドも同程度の範囲です——これは意思決定を左右するほどの差ではありません。

ベトナムが実際に提供しているのは質の高さです。ベトナムの開発者はHackerRankのDeveloper Skills Indexで世界23位まで達したことがあり、人口規模がはるかに大きく、宣伝力も強い市場を上回っています。この業界は年間約30%のペースで成長しており、毎年55,000〜60,000人の新卒技術者を輩出する約55万人規模の開発者基盤は、レガシーシステムの保守よりもクラウドネイティブ、モバイルファースト、プロダクト開発といった現代的な技術スタックに重きを置いています。

ベトナムは日本にとって第2位のソフトウェアアウトソーシングパートナーでもあり、この関係を通じて、欧米のクライアントがほとんど求めることのない水準の文書化の厳格さと不具合管理の規律が業界内で確立されました。しかしその恩恵は、欧米のクライアントもすぐに享受することができます。

オーストラリアにとっての優位性

拠点	AEST（豪東部標準時）との時差	実務上の効果
ベトナム（GMT+7）	3〜4時間	午後を通じて当日中の完全な重複対応が可能
フィリピン（GMT+8）	2〜3時間	同程度の重複対応が可能
インド（GMT+5:30）	4.5〜5.5時間	朝の質問が翌日回答になることが多い

オーストラリアおよびニュージーランドのチームにとって、ベトナムは真の意味での当日対応可能な業務時間帯を提供します——メルボルン時間の午前9時に提起された質問が、その日の午後には回答されるのです。

ベトナムが誠実な答えとなる場合、ならない場合

これを率直に伝えられないベンダーは、あなたに対して誠実であるとは言えません。

- フィリピンを選ぶべき場合：英語によるリアルタイムの消費者向け音声対応業務——コールセンター、リアルタイムチャットサポートなど。この点については議論の余地がありません。
- インドを選ぶべき場合：300名以上のエンジニアを要する大規模プロジェクトや、複雑なレガシー・メインフレームシステムを扱う場合——ベトナムの約55万人規模の開発者人材プールはインドの約10分の1にすぎず、その技術基盤はクラウドネイティブ志向であり、COBOLのようなレガシー技術には向いていません。
- ベトナムを選ぶべき場合：その中間に位置するあらゆる業務——プロダクト開発、専属エンジニアリングチーム、SaaSやECプラットフォーム、AI・データ関連業務、QA、そして高い精度が求められるバックオフィス業務など、人員規模の柔軟性よりも継続性と現代的な技術力が重視される領域です。

結論

ベトナムは最も安価なオフショア市場ではなく、誠実なベンダーであればそのように売り込むことはありません。ベトナムが提供するの、異なる形の価値です。すなわち、主要3拠点の中で最も低く、最も安定した離職率、世界トップ25に位置づけられるエンジニアリング水準、今日のソフトウェア開発の実態に即した現代的な技術スタックへの専門性、オーストラリアのクライアントにとっての当日対応可能な業務時間帯、そしてインドの賃金上昇やフィリピンの台風リスクとは無関係な独立したリスクプロファイルです。

三者それぞれのマーケティング的な言説を取り除けば、最終的な判断は一つの問いに集約されます——あなたは実際に何を構築しようとしているのか。コールセンターが必要なならフィリピンです。500人規模のレガシーシステム移行が必要なならインドです。そしてその中間にあるすべて——プロダクト開発、専属チーム、長く使い続けるプラットフォーム——は、ベトナムの領域です。そして2026年において、それはもはや代替の選択肢ではなく、標準の選択肢となっています。

本書は、オフショアのソフトウェアエンジニアリングパートナーを検討しているバイヤー向けの一般的な市場参考資料として発行されています。掲載数値は公開されている業界指標およびベンダーの料金基準に基づいてまとめられたものです。契約を確定する前に、各ベンダーに対して職種別の具体的なデータを求めることをお勧めします。